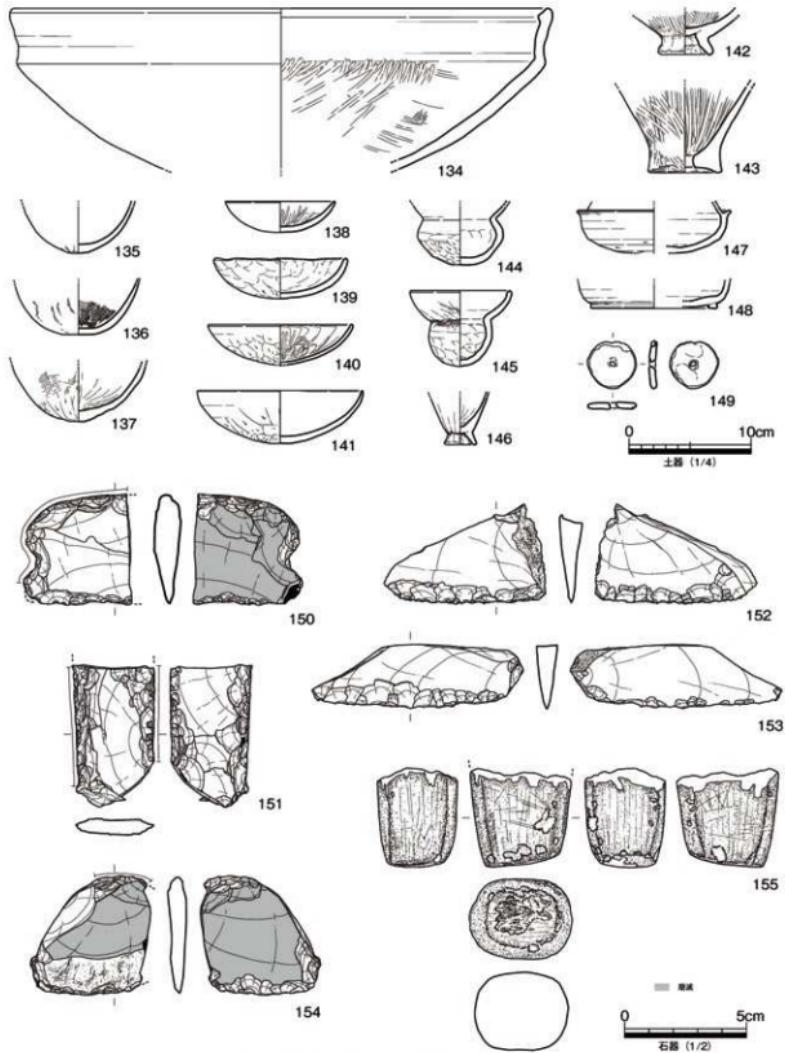


第37図 SR01 中層出土遺物実測図4

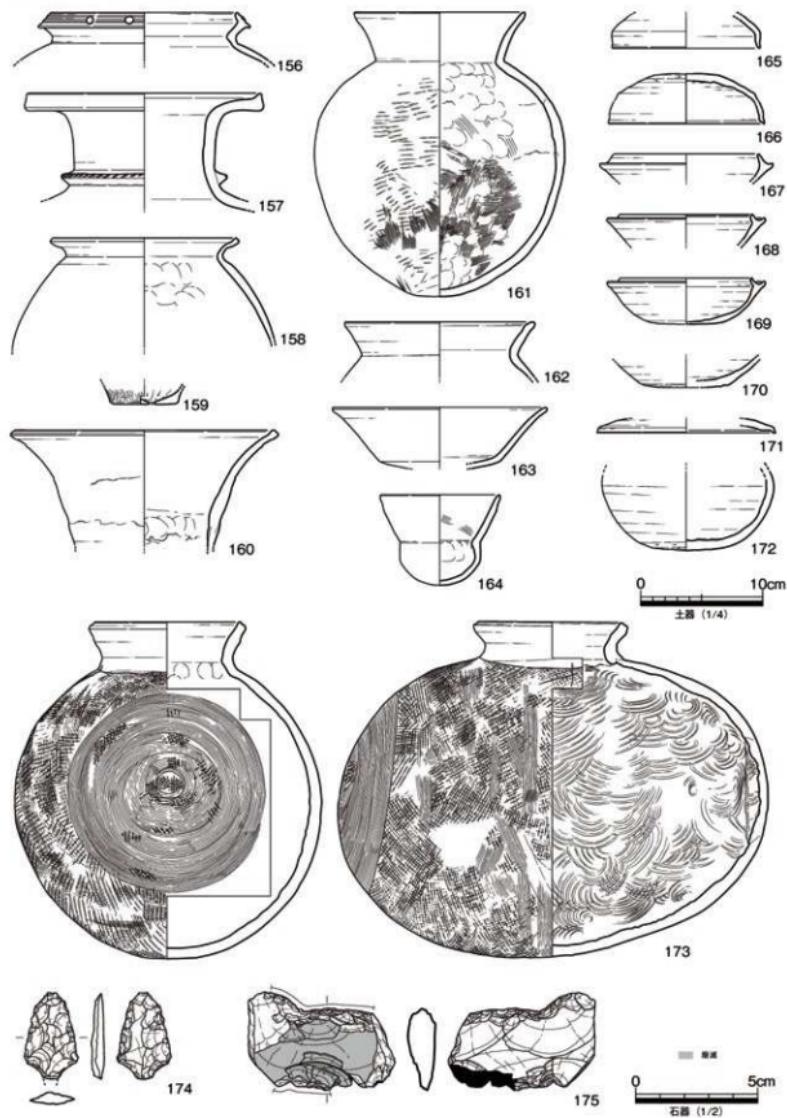


第38図 SR01中層出土遺物実測図5

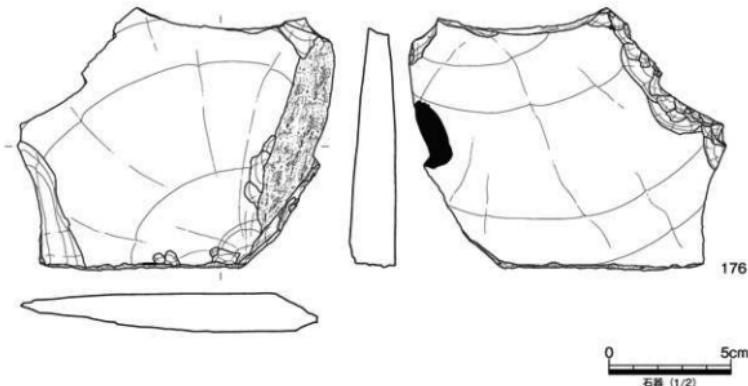
自然河川・低地帯

SR01（第30～42図）

SR01は、Ⅲa区南東部より緩やかに西へ屈曲し、Ⅱa区中央部でさらに北へ屈曲して調査区外へ延



第39図 SR01上層出土遺物実測図1



第40図 SR01 上層出土遺物実測図2

長する。II a区屈曲部で、南よりSR02が合流する。これら流路は、扇状地上面の旧中州間の低地帯と考えられ、後述するように下位層を中心に水成堆積層を認める。また、第4図に示すように、多肥松林遺跡1・5次調査区、松林遺跡1次調査区で、本流路の延長が確認され、多肥松林遺跡1次調査区西②区SR101と松林遺跡1次調査区SR01（香川県教育委員会・財團法人香川県埋蔵文化財調査センター 1999）では、低地帯最下層で縄文時代晩期の堆積層が確認されている。本調査区では当該期の堆積層は後述するように確認されておらず、低地帯の埋没が一様に進行したものではないことを示している可能性がある。

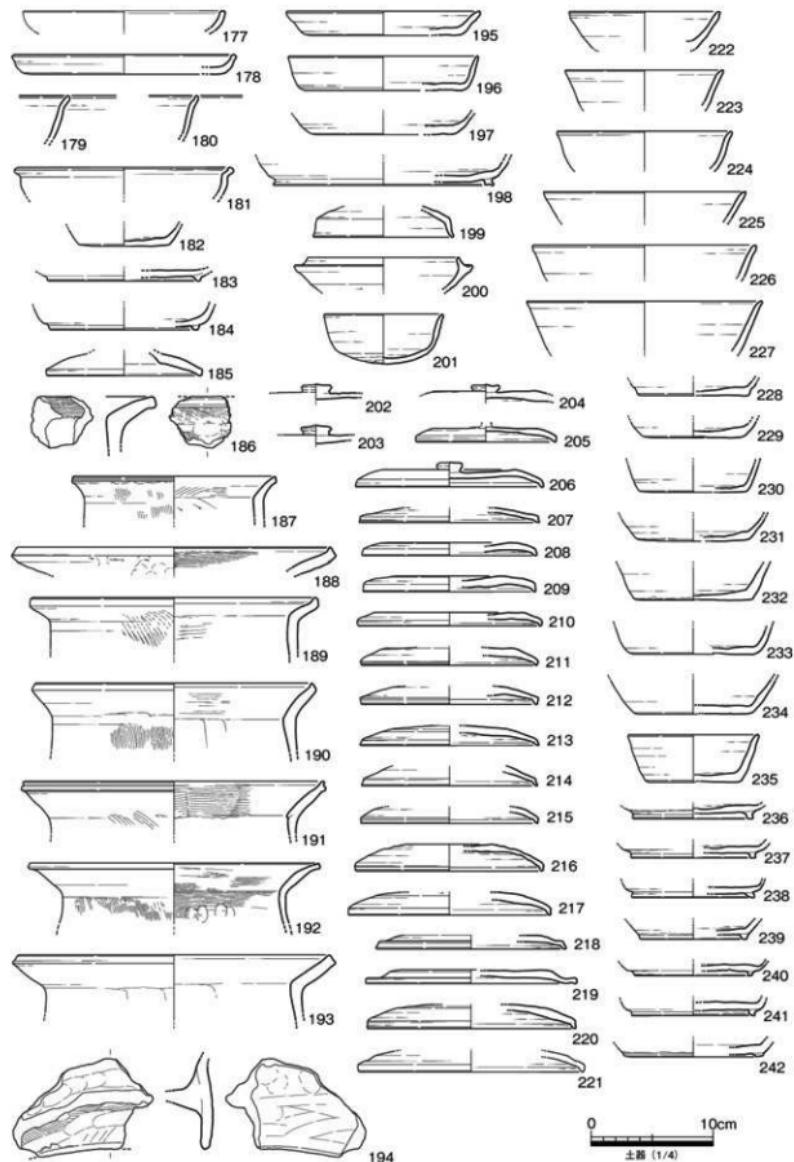
さて、SR01は、検出面幅20～23m、残存深0.8～1.0mで、断面形は両岸が緩やかに落ち込んだ腕底状を呈する。埋土は最大16層に細分され、最上～最下層の5層に大別する。

最下層は、流路底面に堆積した灰～黒色系シルト層を主体とする堆積層で、一部に弱水流下堆積の可能性を示す砂層の混入を認める。後述するように、弥生時代中期を上限とする遺物が出土しており、当該期の堆積層と考えられる。

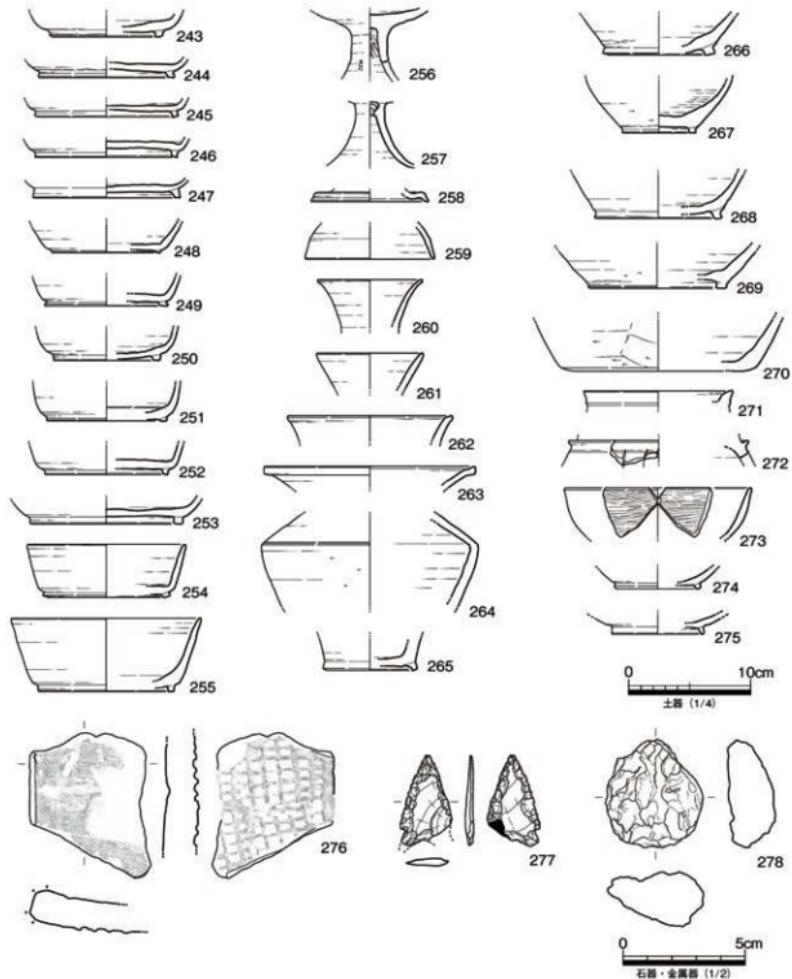
下層は、後述するSR02より連続する灰色系シルトないし砂層で、流路機能時の流水下堆積層である。SR02との合流部以北に堆積が確認され、最下層を大きく削奪して堆積する。

中層は、黒色系粘土層で、2層に細分される。層厚は最大0.15m前後を測る。古墳時代後期前葉を下限とする遺物が、大量に出土した。流路機能停止後、低湿地状を呈して徐々に埋没が進行したと考えられ、低地帯内の自然堆積層と考える。

上層は、本流路の上位層の大半を占める暗灰茶褐色ないしは黒色粘土層で、5層に細分される。層厚は最大0.4mを測る。本層中位層（第30図5層）は、流路北東部の地山層上面に広く包含層状に堆積し、本層下面は概ね水平であった。本層堆積前に、上述した流路中層上面のみならず、流路東及び北岸のベース層を含め、本層が堆積する幅約23mの範囲を開削し、流路上面を中心に帶状の平坦面を造成した可能性が考えられる。また、本層下面は細かな起伏が顕著に認められ、本層で充填された不定形な落ち込みが多数検出された。遺物量も下位層と異なり、非常に乏しい点からも、本層を耕土とする水田が営まれた可能性が考えられるが、畦畔等の施設は検出されず、またプラントオバールの分析試料も採取されておらず、検証はできない。なお、上述したようにSR01上面は本層堆積時に開削・造成され、遺構と



第41図 SR01 最上層出土遺物実測図1



第42図 SR01 最上層出土遺物実測図2

しての流路幅はやや拡張されている。したがって、古墳時代後期中葉以前のSR01については、上述した中層堆積層の範囲である幅約9~20mの流路部分を指し、例えば後述する土坑SX10等は、SR01北岸に設けられた遺構として報告する。

最上層は、SR01上面にレンズに堆積した灰褐色系粘土層で、2層に細分される。層厚は最大0.2m前後を測る。遺物は、小片化した弥生土器のほか、土師器や須恵器が一定量出土している。埋土の内容

や遺物の出土状況より、流路上面の窪地を埋めた造成土と考えられ、低地帯に伴う窪地は本層によりほぼ平準化されたと考えられ、後述するように13世紀中葉を上限とする溝SD57が、流路上面を穿ち南北に配される。なお、古代の遺物は多量に出土しており、流路周辺で当該期の集落等が所在した可能性が考えられる。

上述したように、本流路は弥生時代中期から中世初頭にかけての堆積物で充填されるが、下位層を除けば水成堆積層は不明瞭で、一時期水田等の耕作地として利用されつつ、低湿地状を呈して緩やかに埋没が進行したと考えられる。

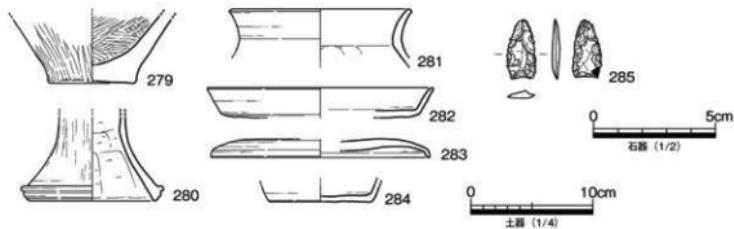
遺物は、コンテナ55箱と多量に出土した。最上層及び中層（3層）からの出土が多く、それらの時期には、低湿地部として生活残滓の廐棄場所として利用されていた可能性が考えられる。以下、最下層より順に、各層出土遺物について報告する。

第32図は最下層出土の資料である。13は弥生土器広口壺、14・15は同細頸壺である。16は同大型壺で、頸部に押捺突帯を貼付する。17は同壺、18は同壺の底部片である。19は片口を有する同台付鉢。20～22は同高杯もしくは台付鉢の脚部の小片である。21には、小円孔と脚端部に及ぶ矩形とみられる透孔を穿つ。23は底部丸底の同鉢である。資料のうち、22はやや古く弥生時代中期前葉に遡る可能性があるほかは、中期中葉の資料が主体を占め、当該期に埋没した可能性が考えられる。なお、17・23は弥生時代終末期前後に位置付けられ、上位層からの混入と考える。

第33図は下層出土の資料である。弥生土器短頸壺24、同広口壺25、同細頸壺26、同壺底部27、同壺28は、いずれも弥生時代中期中葉前後に位置付けられ、上述した最下層に本来帰属する資料であろう。一方、弥生土器広口壺29や古式土師器広口壺30・31、同複合口縁壺33、弥生土器壺34、東四国系の古式土師器壺35、布留系の古式土師器壺36、弥生土器高杯37～39、同小型丸底土器41・42は、弥生時代終末期～古墳時代前期前葉に位置付けられ、本層堆積時期の下限を示す資料であろう。なお、29・34・37・38は、胎土中に角閃石粒を含む香東川下流域産土器である。

43はサヌカイト製のスクレイパーである。背部は敲打による潰しがみられ、また背部を中心に強いマツ痕を認める。打斧の転用品の可能性がある。44はヒノキ科の薄い板材片。表面は腐食等が顕著だが、左図下端に加工痕を認める。45・46は腐食部分以外に炭化痕を認める、ヒノキ科の棒状の材である。いずれも腐食が顕著であり、調整痕等は不明。

第34～38図は、中層出土の資料である。出土資料の大半は、下位層からの混入とみられる弥生土器や古式土師器である。弥生土器細頸壺47、同広口壺48～57、同壺58・59、同長頸壺60、同無頸壺61・62、同壺74～80、同高杯106～113、同台付鉢126・127は中期中葉～後期前葉を前後する時期に位置付けられ、本来は最下層に帰属する資料である。48は、口縁部内面に2列7個の竹管文を4単位施し、頸部外側にはハケ原体による刺突文で飾る。57は、口縁端部を上下に拡張して端面に4条の凹線文と斜線文、3個1対の円形浮文で加飾する。また頸部には、ハケ原体による刺突文を上下2段に施す。58は、装飾壺の頸基部～体部の破片で、幅広の突帯を貼付し、その周囲を鋸歯文や竹管文、半截竹管文で装飾する。59は、同壺体部の小片で、胴部最大径付近に、ヘラ状工具による刺突文を上下2段に施す。60は、口縁部直下に3条のやや粗雑な押捺突帯を貼付し、その下位を櫛描の直線文と波状文で飾る。143は、壺とみられる底部片で、底部中央に径約10cmの円孔を穿孔する。146は、備讃Ⅱ式の製塙土器である。149は、土器体部片を転用した径約4cmの土製紡錘車で、中央部に長径0.7cmの孔を穿つ。



第43図 SR02出土遺物実測図

また、広口壺 63～70、二重口縁壺 71、直口壺 72・73、甕 81～105、高杯 114～125、鉢 128～141、台付鉢 142、小型丸底土器 144・145、製塩土器 146 は、弥生時代後期後半～古墳時代前期前葉に位置付けられ、本来は下層に帰属する資料であろう。86・88・90・91・93・114～121・123・134 は、胎土中に角閃石粒を含む香東川下流域産土器である。また、87・92・122 は、角閃石粒が認められず、同土器の模倣形態であろう。94～104 は東四国系の、105 は布留系の、それぞれ古式土師器甕である。123 は、杯部中央底面を穿孔しており、祭祀用の土器の可能性がある。

147 は須恵器杯身で、TK23～MT15型式併行期前後に位置付けられ、後述する上層資料の時期を考慮すると、資料数はかなり限定されるものの、本資料の示す時期が本層堆積時期を示す可能性が高い。148 は、8世紀代の須恵器杯で、上位層からの混入資料であろう。

150～154 は、サヌカイト製の打製石器類で、150 は打製石庖丁の残片。図右面にはマツメ痕を認める。151 は打製石剣と考え、図示した。両側縁には、敲打による刃潰が認められる。152～154 はスクレイパーである。155 は、徳島県眉山北麓産の青色片岩製の磨製石斧基部付近の小片である。

第39・40図は、上層出土資料である。本層からも、下位層からの混入の弥生土器片がやや多量に出土している。156 は弥生土器短頸壺、157 は同広口壺である。160 は古式土師器広口壺で、161 は同直口壺。球化した体部に、やや受け口状を呈する口縁部が付す。158・159 は、香東川下流域産の弥生土器甕で、159 は底部に径 0.4cm 程度の円孔を焼成後に穿孔する。162 は、布留系甕である。163 は古式土師器高杯の杯部片、164 は同小型丸底土器である。

165・166 は須恵器杯蓋、167～170 は同杯身である。166 が MT85 型式併行期前後に位置付けられる以外は、概ね TK43～TK217 型式併行期前後に位置付けられ、173 の同横瓶と共に本層堆積時期の資料を考える。173 は、一部を欠損する以外はほぼ完形に復元され、肩部に「×」字のヘラ記号を刻む。171 の同蓋は、8世紀後葉～9世紀前葉に位置付けられ、上位層からの混入資料と考える。

174 はサヌカイト製の凸基式石鎌、175 は同楔形石器、176 は大型の板状剥片で、いずれも下位層からの混入資料であろう。

第41・42図は、最上層出土の資料である。177・178 は土師器皿、179～183 は同杯。いずれも畿内系土師器とみられ、器表面が剥落した 177・180 を除いて、内外面はベンガラにより赤彩されていた可能性がある。184 は土師器杯としたが、焼成不良の須恵器の可能性がある。185 は同高杯の脚部の小片。186～193 は同甕である。186 の外面には煤が付着する。194 は同移動式竈の小片で、焚口部上部の小片と考え図化した。

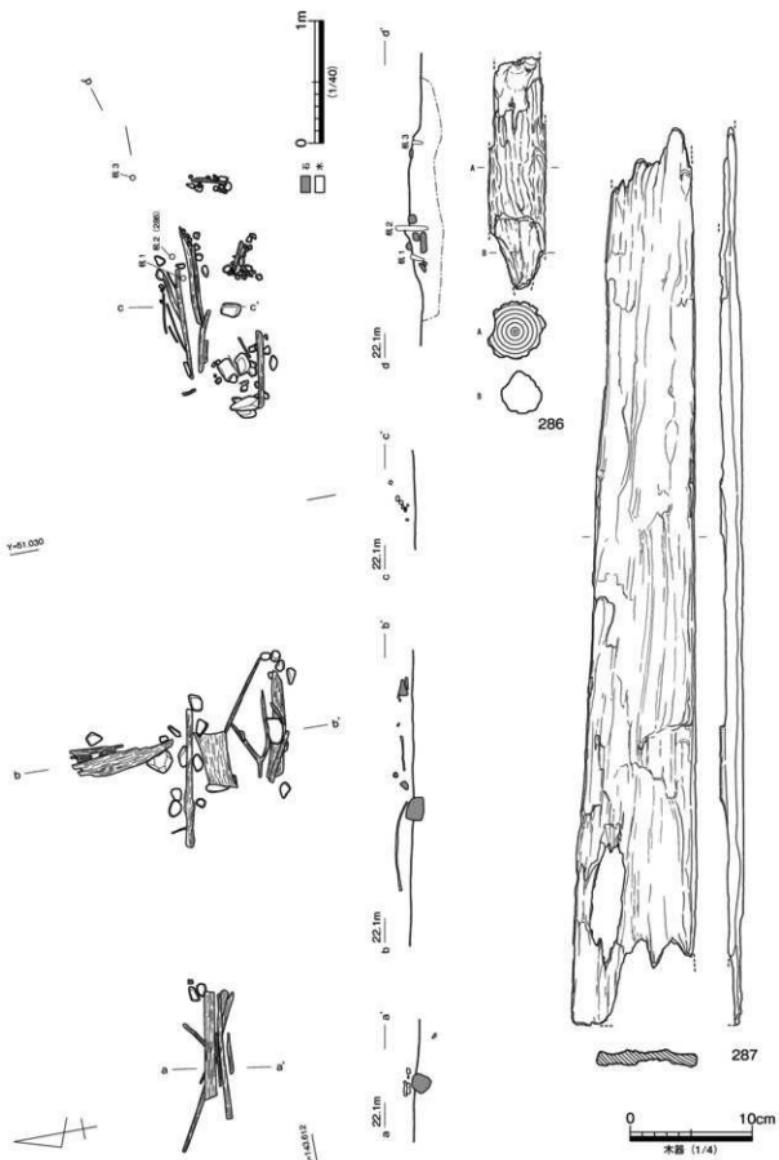
195～198 は須恵器皿である。198 は杯身となる可能性もある。199～201 の同杯類は、TK217 型

式併行期前後
に位置付けられ、上層に帰属する資料であろう。202～221は同蓋。ツマミは算盤玉形ないしボタン状を呈する。口縁端部を強く下方に挽き出すものと、口縁部を屈曲させるもの等がある。222～255は同杯身で、口径等により、いくつかの規格が認められる。245の内底面は磨滅しており、転用硯の可能性があり、231の内面には、墨とみられる黒色物が付着する。後述する円面硯を補完する資料として注目される。

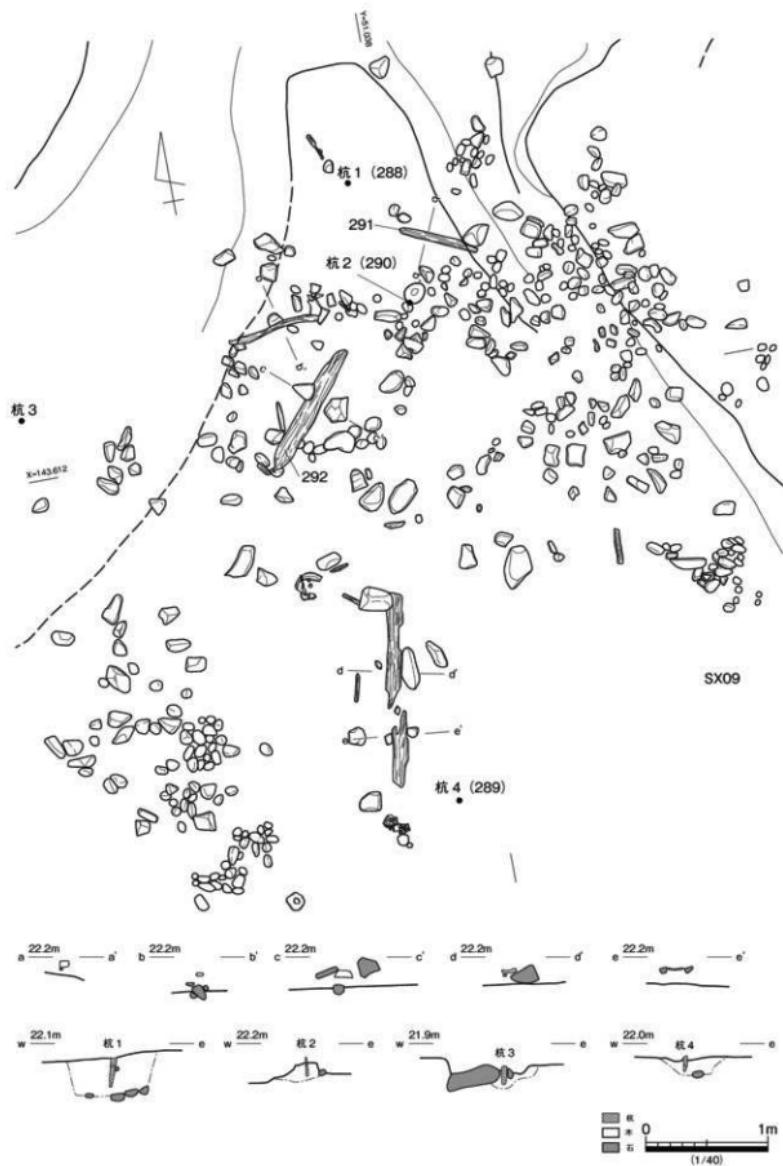
256～258は、須恵器高杯。259は同蓋としたが、別の器種の可能性もある。260～263は、同壺類の口縁部片、264は同長頸壺の体部



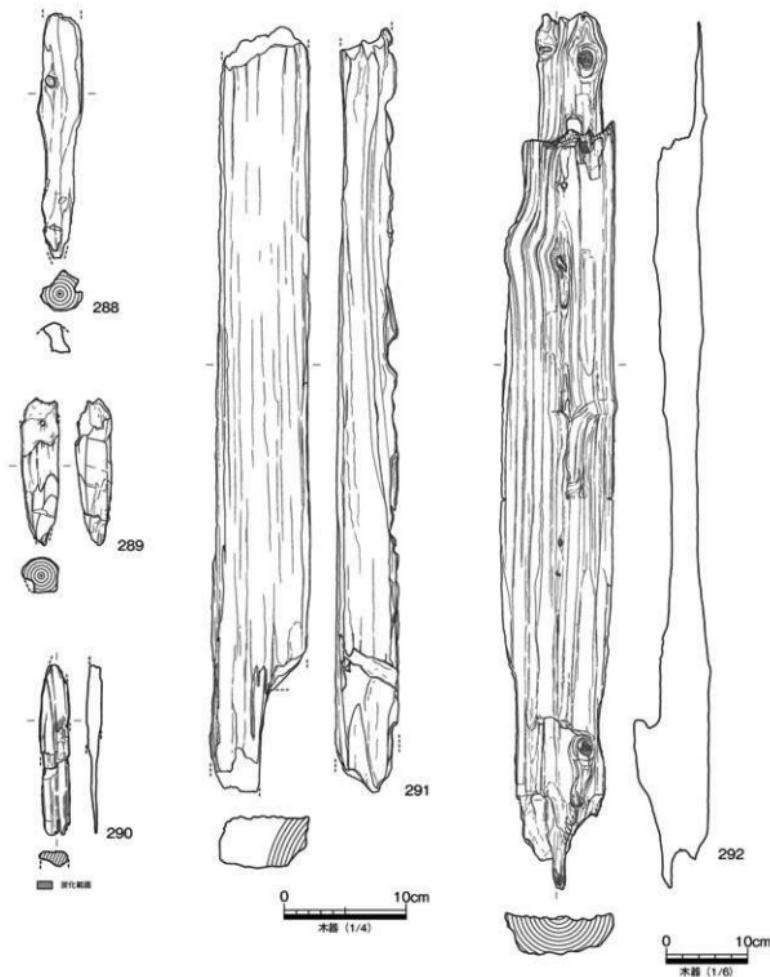
第44図 SX07～SX10位置図



第45図 SX07 平・断面・出土遺物実測図



第46図 SX09 平・断面図



第47図 SX09出土遺物実測図

片、265～270は同壺類の底部片である。高杯や壺類の一部は、TK217型式併行期前後に位置付けられ、上層からの混入資料である。271・272は、須恵器円面観の小片で、271は外堤部、272は脚部の小片と考え図化した。273～275は、黒色土器碗。274・275は磨滅が顕著だが、273は内外面に密なミガキを施す。276は、凸面に格子タタキを施す布目平瓦の小片である。277は、サヌカイト製の凹基式石鎌。278は鉄滓である。

以上の資料のうち、土師器や須恵器の皿・杯類は、概ね8世紀後葉～9世紀前葉にまとまり、土師器甕も9世紀代を中心とした時期と考えられ、円面鏡や平瓦片も当該期に位置付けられる可能性がある。一方黒色土器類は、12世紀前葉までに收まり、本流路埋没時期の下限を示す。

SRO2 (第31・43図)

II a区南西隅部で検出した自然河川で、既述したように北端部はSRO1に合流し、調査区中央部で大きく屈曲し、北西方向へ流下する。検出面幅約14m、残存深0.8～0.9m、断面形は両岸が緩やかに落ち込み碗底状を呈する。埋土は3～6層に細分され、上～下層の3層に大別する。上・中層（第31図1・2層）は、上述したSRO1最上・上層にそれぞれ相当し、下層堆積後SRO1とともに低湿地状を呈して緩やかに埋没が進行したと考えられる。下層（同図3層）は、灰色系シルトないし砂で構成される流路機能時の水成堆積層である。

遺物は、SRO1との合流部を含めコンテナ3箱が出土した。**279・280**が下層、**281・285**が中層、**283・284**が上層出土のそれぞれ資料で、**282**の出土層位は不明。**279**は弥生土器壺底部、**280**は同高杯脚部片で、いずれも弥生時代中期中葉前後に位置付けられる。**281**は、布留系甕の口縁部片で、SRO1上層に対応する層位からの出土であり、混入資料であろう。**282**は須恵器皿、**283**は同蓋、**284**は同杯身であり、SRO1最上層出土資料と同時期のものである。**285**は、サスカイト製の打製石鎌である。

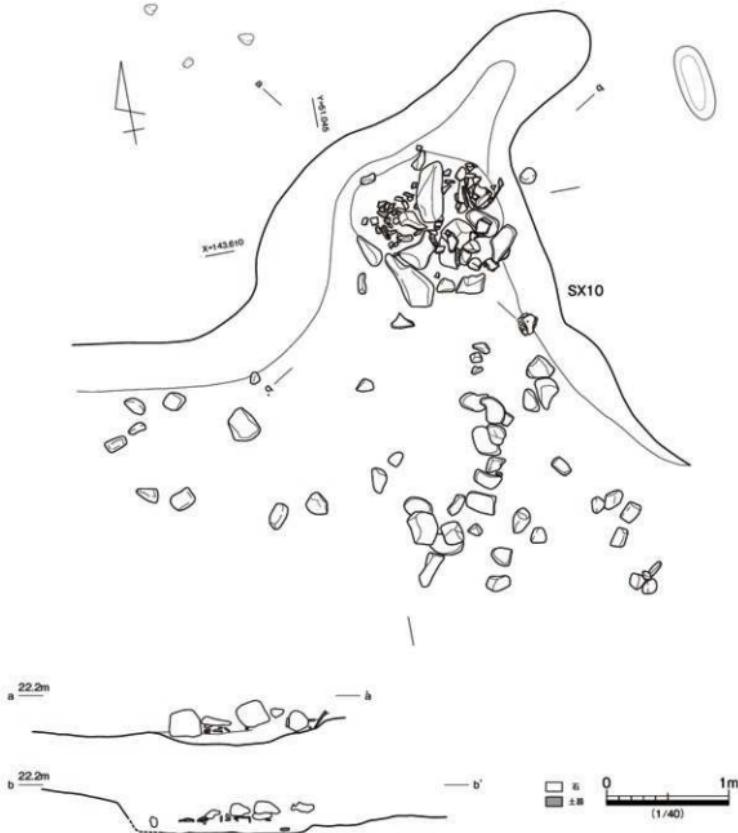
SX07 (第44・45図)

II a区SRO1北半部底面で検出した木群である。流路埋土との関係は不明だが、底面付近で検出していることから、最下層ないしは下層中に埋没していたものと考えられる。木群は、1～2m程度離れて東西に3群が認められ、いずれも長さ0.5～1.0mの棒状や板状の材を、流路主軸とやや斜交して配し、各群は概ね直線状に並ぶ。また、東群では地山面に打ち込まれた木杭3本が検出された。木群の周囲からは、拳大～人頭大の礫が若干量出土している。流路に斜交しつつも直線状に配され、近接して木杭が打設されていることから、人為的に据え置かれた可能性を考えられるが、散在する礫についての人為性の有無は不明である。

板材等は、概ね水平に置かれ、いくつかの材は重なって出土しているが、その配置に明確な規則性は窺えない。また、木杭は概ね直線状に打設されているが、間隔は一定せず、わずか3本ということもあり、打設意図については明らかにし難い。地山面への木杭の打設深度は0.1m前後と浅く、板材等は地山面より0.1～0.2m程度浮いて出土していることから、おそらくは下層ないしは最下層堆積後に打ち込まれた可能性を考える。仮にそのように考えても、木杭の根入れの深さは0.2～0.3mと浅く、さほどの強度は期待できないであろう。

遺構の性格について、調査担当者は堰の可能性を想定していたようだが、木杭の本数が乏しくその可能性は低い。木材加工に伴う貯木施設の可能性についても、丸太材やミカン割材は認められず、また後述するように出土資料すべてが残されていないため、判断できない。木道や護岸施設の可能性も考えたが、関係する他の構造物の有無、そもそも木群のみが据え置かれていたものか等、情報も乏しいこともあり性格を特定することはできない。

遺物は、木杭や板材等の木質資料が数点あり、本遺構に伴う土器や石器類は出土していない。既述したSX08同様に、本遺構からも挿図に示すように木質資料は多量に出土しているが、取り上げられた



第48図 SX10 平・断面図

資料は挿図に示した木杭1点286と板材1点287を含む4点に限られる。286の下端部は、断面多角形状に削られているようだが、腐食や劣化により、加工痕は不明瞭である。クヌギが利用されている。287も、加工痕等は不明で、一部腐食により孔が開く。また図上端と下端で幅が異なり、下端の方が現状で約3cm広い。ヒノキ科の材が利用されている。

本遺構については、共伴する土器資料を欠き、時期を特定することができなかった。したがって出土した木製品2点について、放射性炭素年代測定を実施した。分析の詳細は第4章に記載した。分析の結果、 2σ 暦年範囲のうち90%以上の確率を示す値は、calAD1-238の年代幅を示した。試料点数が2点と僅少で、いずれも最終形成年輪を欠くという試料上の制約は伴うものの、SR01堆積層との関係からすれば、下層に対応する測定値であり、現地での調査成果と大きくは矛盾せず、遺構の年代を示して

いるものと評価したい。

SX09（第44・46・47図）

本遺構も、Ⅱ区SR01中央東半底面付近で検出した木群である。SD43とSD44に挟まれた位置で検出され、既述したようにSX08の南延長上、SX07の東部に位置する。SX07と一連の遺構の可能性も考えられたが、やや離れていることと、各木質資料の方向が異なることから、別遺構として報告する。本遺構では、SX07と異なり、材や木杭の配置に方向性は認められず、やや散在して配され、多量の石礫が伴う。大型の材は5点程度、木杭は4本が確認され、周囲から若干の土器資料も出土しているようである。上記した以外に、材や木杭の出土状況に、SX07と大きく異なる様相は認められない。木杭を周囲に打設していることから、何らかの目的を有した構造物であった可能性は考えられるが、SX07同様、調査記録よりその性格を特定することはできない。

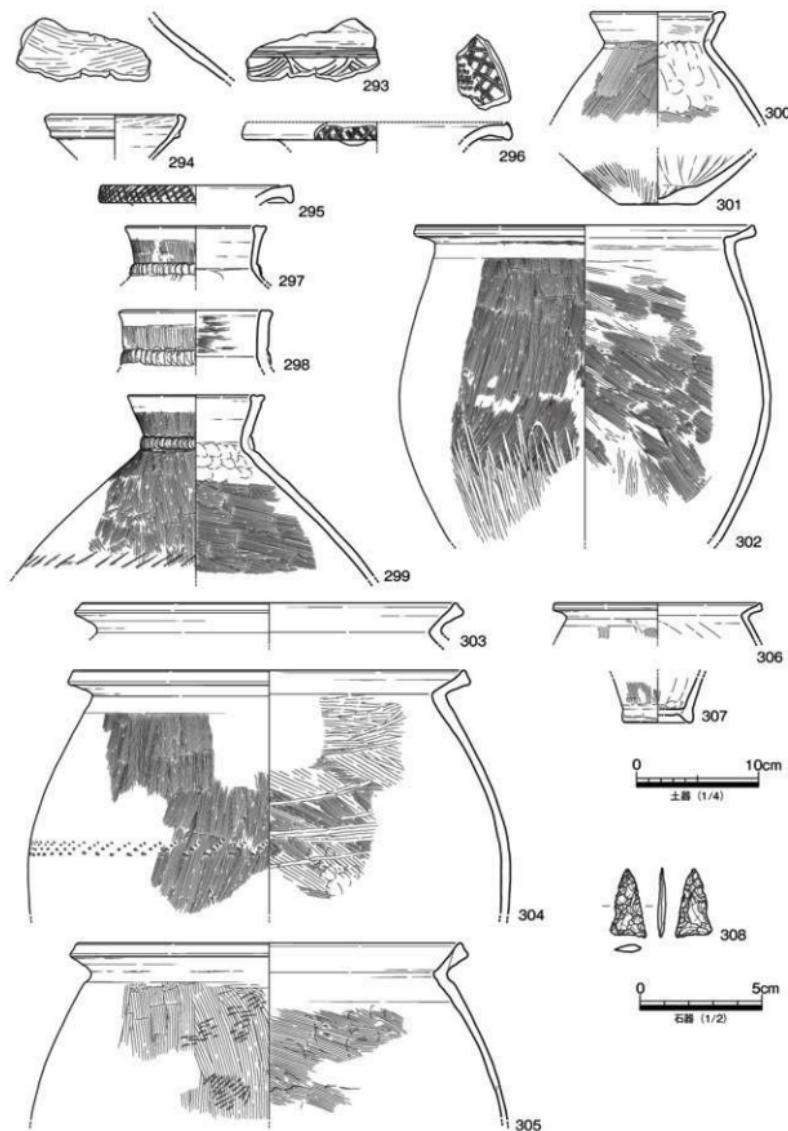
本遺構でも、木質資料の残存状況は劣悪である。**288～290**は、径3～4cm程度の芯持ち材を利用した木杭である。**288**はクリ、**289**はモミ属、**290**はヒノキを用いる。**289**は下端を多角形状に尖らせるが、**288**では表面は腐食等により大きく損なわれ、下端部の一部に調整痕を認めるに過ぎない。**290**は木杭として記録されているが、現状からはもはや木杭とは確認できない。なお、**290**の表面は、一部炭化している可能性がある。**291**は、長さ約63cmのスギの角材で、表面は腐食により加工痕等は不明。さらに、下端部に柄状の削り込みがみられるが、人為的に加工したものかどうかも判断できなかった。**292**も板材とみられるが腐食が著しい。ヒノキを利用する。図上端は矩形の削り込みを認めるが、人為的な加工かどうか判断できなかった。

本遺構についても、SX07同様に土器資料を伴わず、時期を特定することが困難であったため、出土した木材の放射性炭素年代測定を実施した。分析の詳細は第4章に記載した。分析の結果、やや測定値にバラツキが認められたが、最終形成年輪が残る**289**の分析値より、 2σ 曆年代範囲はcalAD380-430と考えられ、SR01の堆積層では下層～中層に対応する。この年代はまた、既述したSD43に設けられた壙SX08での同分析の測定値に近く、SX08埋没後にもSR01周辺が耕地として利用されていた可能性を示しているとも考えられる。

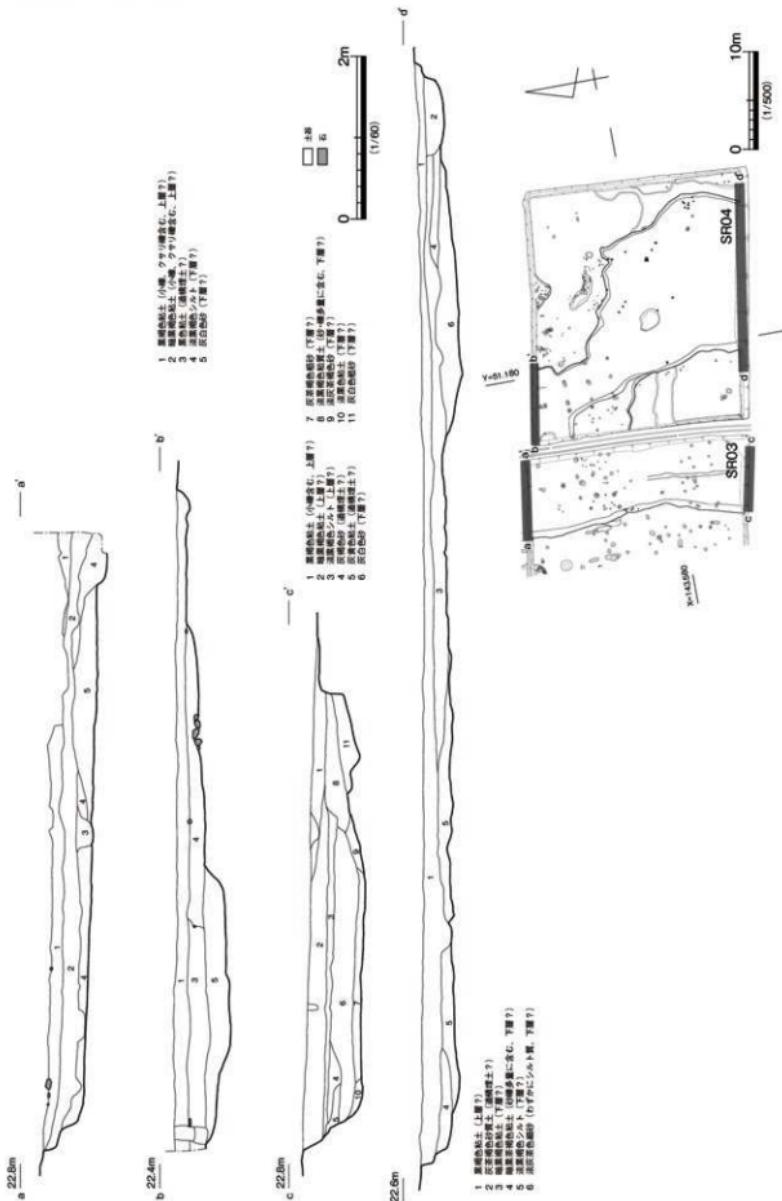
SX10（第44・48・49図）

Ⅱa区SR01中央北岸付近に位置し、不整な溝状に北に突出した落ち込みの、底面付近で検出した配石遺構とされる。既述したように、SR01上層下面で検出したことから、遺構上面は大きく削奪された可能性が考えられる。拳大～人頭大程度の多量の礫が径1.2mの範囲にまとまり、混在して多量の弥生土器が出土した。SR01と一連の遺構として調査されたため、性格不明の配石遺構とされたようだが、礫下面是楕円形状に掘り窪められており、後述するように出土遺物の時期もまとまるところから、SR01北岸際に穿たれた集石土坑の可能性を指摘しておく。埋土についての情報は記録されていない。

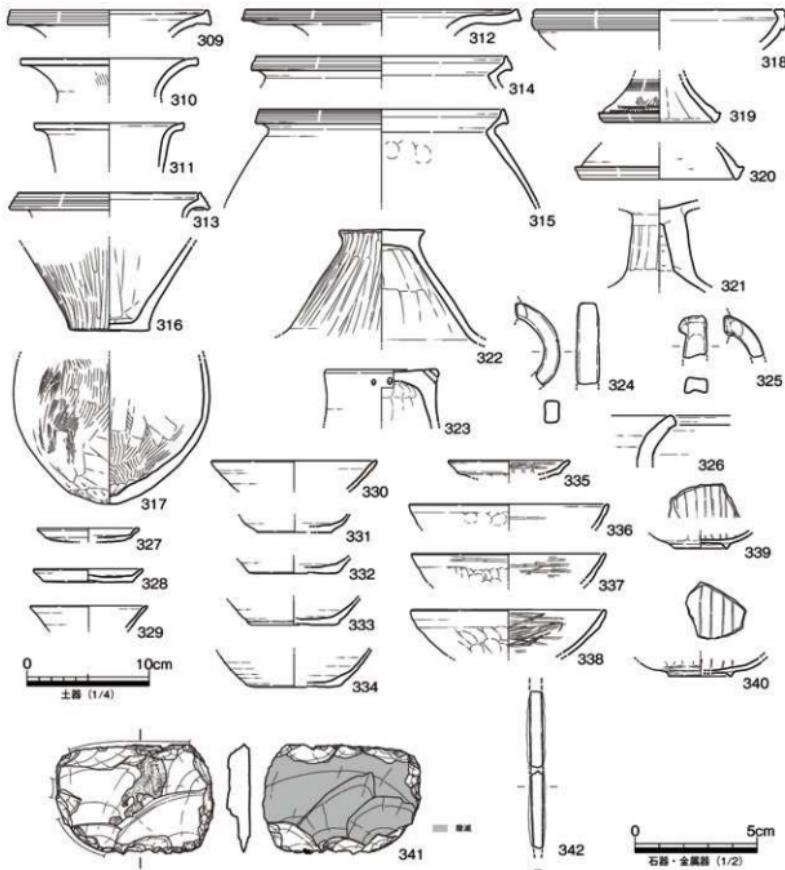
293は弥生土器壺の体部片で、外面にヘラ描きの直線文と重弧文を描く。前期に遡り、混入資料であろう。**294**は同細頸壺、**295・296**は同広口壺の口縁部小片である。**295**は端面に格子文を刻み、**296**は、口縁部内外面を格子文と刺突文で飾る。**297～300**は同短頸壺。**300**を除いて、いずれも頸基部に押捺突帯を貼付し、**299**は体中央部にハケ原体の刺突文を加える。**301**は壺の底部片で、外面には煤が頗るに付着する。**302～306**は同壺である。**307**は上げ底の底部片で、前期に遡る。**308**はサヌカイト製平



第49図 SX10出土遺物実測図



第50図 SR03・SR04平・断面図



第51図 SR03・SR04出土遺物実測図

基式石鎚である。上述したように、出土資料は混入と考えられる293と307を除いて、いずれも弥生時代中期中葉に位置付けられ、当該期の土坑とする。

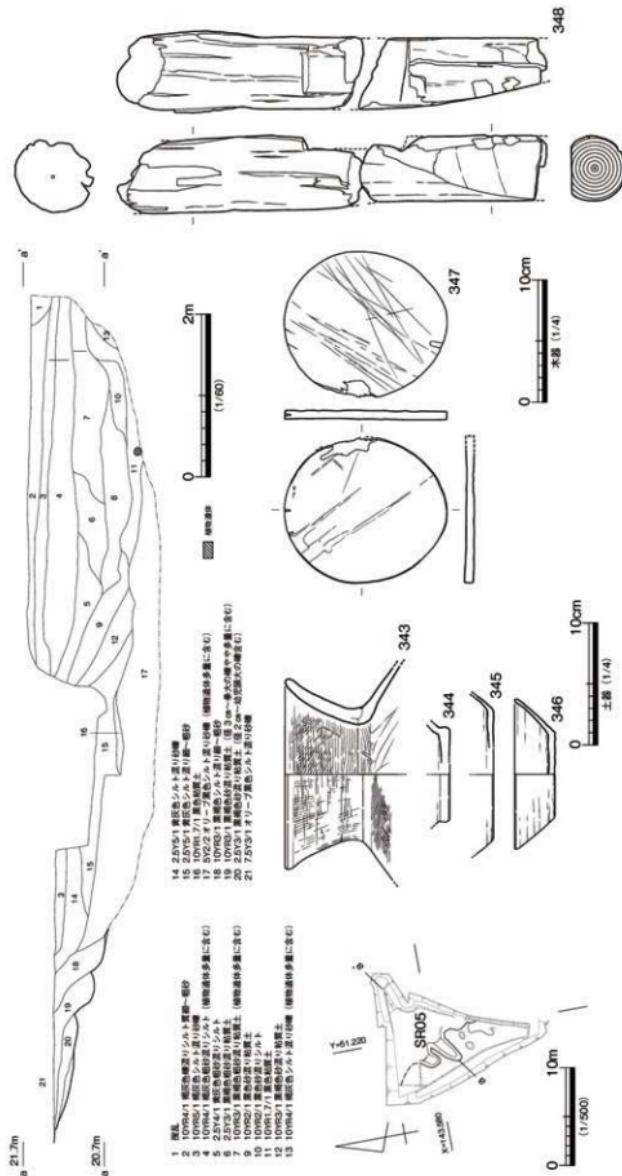
SR03・SR04（第50・51図）

SR03はIVa区東端部を北へ、SR04はIVb区を北西にそれぞれ流下し、調査区北端部で合流して、2次調査IV-1・2区、V-1区SR04（香川県教育委員会2016）へと連続する自然河川である。

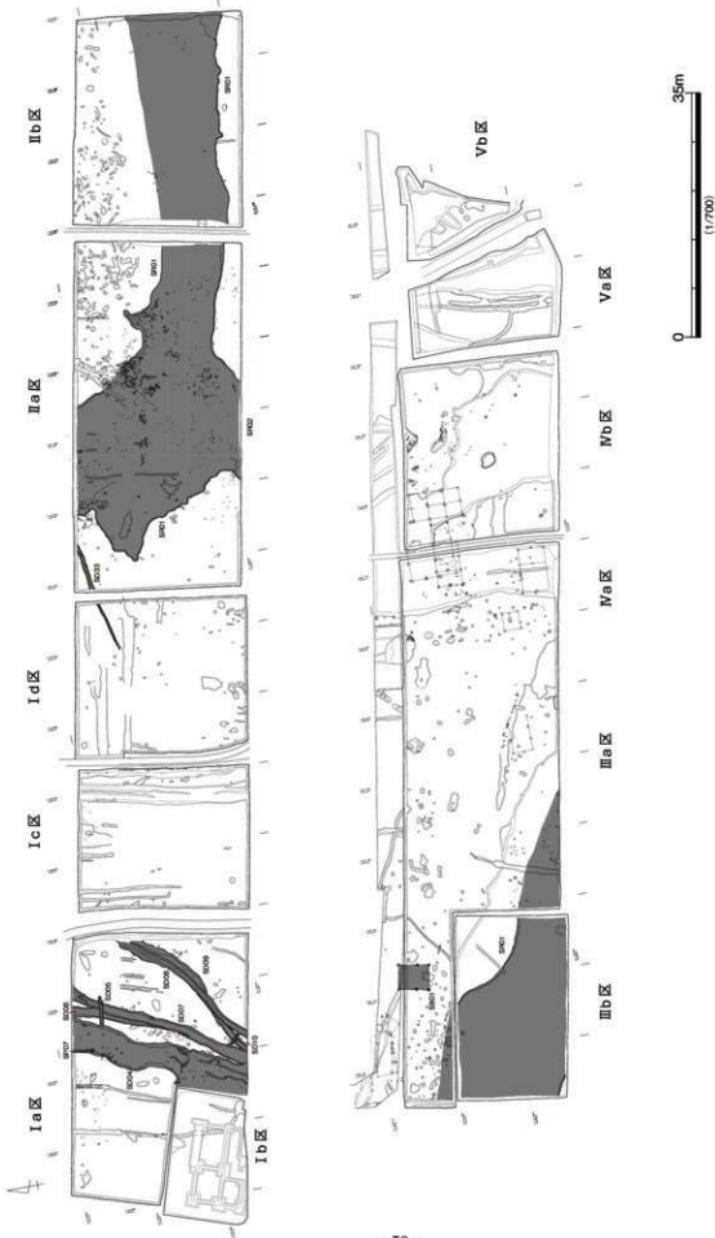
両流路の埋土の観察は、それぞれ調査区北壁と南壁で記録されている。SR03の埋土は5層に細分され、1～4層は5層を削奪するように堆積し、大きく2時期に分けられるようである。また、北壁では4層

上面より、溝か
土坑状の遺構の
埋土と考えられ
る土層の堆積
(第50図a-3
層)も認められ、
本層上面を遺構
面として利用し
た時期の存在が
想定され、その
ことは流路上面
を覆い水平堆積
する上位層(同
図a-1・2層)
は、下位層とは
異なる環境下で
堆積した可能性
を示す。

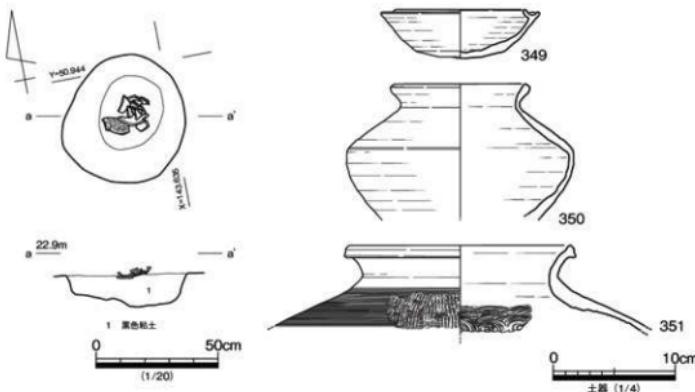
また、SR04も、不安定な流路平面形態や土層断面の観察から、流下時期の異なる複数の流路の重複の可能性が想定されるが、北壁と南壁で堆積層が大きく異なり、流路の復元は困難である。SR04においても、埋土中に、平面的に調査されていない溝や土坑等の、遺構埋土と考えられる土層の堆積（第50



第52図 SR05平・断面・出土遺物実測図



第53図 古墳時代～古代遺構配置図



第54図 SP07 平・断面・出土遺物実測図

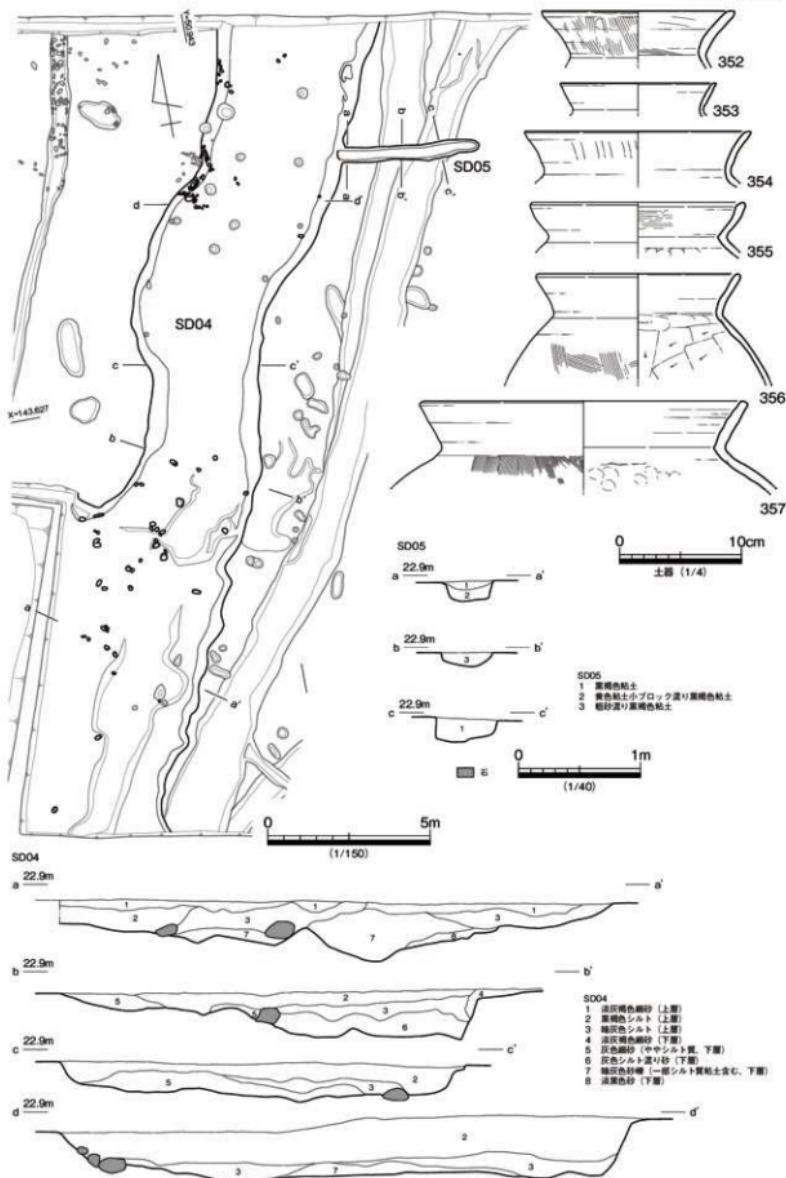
図c-4・5層、同図d-2・4層)が記録され、流路上面が遺構面として利用された時期の存在を想定できる。とくに多量の斎串が出土した、1次調査区SD13の南延長部は本流路内に想定され、既調査区の調査成果が反映されていないのは惜しまれる。

後述するように、本層上面ではSB03～SB06の4棟の中世掘立柱建物が重複して配されており、これら建物群の掘り込み位置は記録されていないものの、上述した埋土中位の遺構面が該当する可能性は高い。

遺物は、弥生土器309～325や須恵器326、土師質土器327～334、黒色土器、瓦器335～340等が若干量出土している。大半の遺物について、出土層位の記載が無く、記録されていたとしても土層図との対応が不明であり、挿図に示した埋土の堆積時期を出土遺物より明らかにすることはできない。341は、上縁と左側縁に敲打による潰れ痕がみられることから、サスカイト製のスクレイパーとした。また、図右面には磨滅痕が認められ、打斧等を転用した可能性が考えられる。342は鉄釘である。

図示した大半の資料はSR03より出土している。両流路の出土遺物の内容に、量的な差を除いて顕著な差異は認められず、概ね両流路が併存し、同様な堆積環境下で埋没したと考えて間違いはなかろう。一定量出土している弥生土器が、本流路下位層の堆積時期を示すものである可能性は高い。しかし、弥生時代中期中葉～同終末期ないしは古墳時代前期初頭といった時期幅があり、下位層の堆積の下限は捉えられても、上限を明らかにすることはできない。

流路埋没の下限は、出土した土師質土器杯330～334や和泉型瓦器皿・碗335～340より、12世紀末～13世紀前葉に求められる。後述する本流路上面に重複する建物群の下限は、12世紀前葉が想定され、仮に本流路上位層よりこれら中世供膳具類が出土したのであれば、上位層は建物群廃絶後の整地層であり、水平堆積していることからすれば、断定はできないものの耕土層として造成された可能性が想定される。



第55図 SD04・SD05 平・断面・出土遺物実測図

SR05 (第 52 図)

V b 区東端部で検出した自然河川で、多肥宮尻遺跡より大きく屈曲して北西方向へ流下し、2次調査 II - 2 区・IV - 3 区 SR03 (香川県教育委員会 2016) へ連続する。検出面幅 8 m 以上、残存深 1.2 m 以上を測り、断面形は碗底状を呈するとみられる。埋土は 30 層以上に細分されているが、逆に埋没状況の理解を困難にしてしまっているよう、各土層の堆積環境についての記録は残されていない。また、遺物もこうした細分された土層に対応した取り上げがなされておらず、結果として各層の堆積時期を明らかにはできない。本流路の詳細については、多肥宮尻遺跡での調査成果を参照されたい。

遺物は、弥生土器や須恵器、土師質土器皿・杯等がコンテナ 1 箱程度出土した。**343** は古式土師器広口壺である。図化した遺物の中では最も古く位置付けられるが、出土資料中に弥生土器片を含み、2次調査の成果を踏まえるなら、弥生時代には埋没が始まっていた可能性は高い。**345** は土師器皿、**346** は須恵器杯で、これらは 9 世紀代に位置付けられる。2次調査区では、当該期の資料として、転用鏡や墨書須恵器等の遺物が出土している。**344** は土師質土器碗で、本資料が埋没の下限を示すと考えられ、12 世紀代を想定する。しかし、いずれも出土層位が不明なため、時期的な埋没過程は不明である。2次調査の成果より、弥生時代から中世に埋没した流路と考える。

347 は、平面楕円形を呈するヒノキの曲物底板であろう。図上縁に木釘による継じ痕 2 箇所を認める。また、図右面を中心に工具による刃物痕を認め、作業台として転用したとみられる。**348** は、径 7 cm 程度のサカキの丸太材を利用する。2 片に折れて接合しないが、同一個体であることは確実であり、復元して図示した。中央部側面に幅 4.0 cm、長さ 7 cm、深さ 1 cm 程度の柄とみられる矩形の刺り込みが施されているようだが、劣化が著しく断定できない。下端を削り、レ字状に尖らせていることから、木杭として使用されたとみられるが、何らかの部材を転用した可能性も考えられる。

古墳時代

柱穴

SP07 (第 54 図)

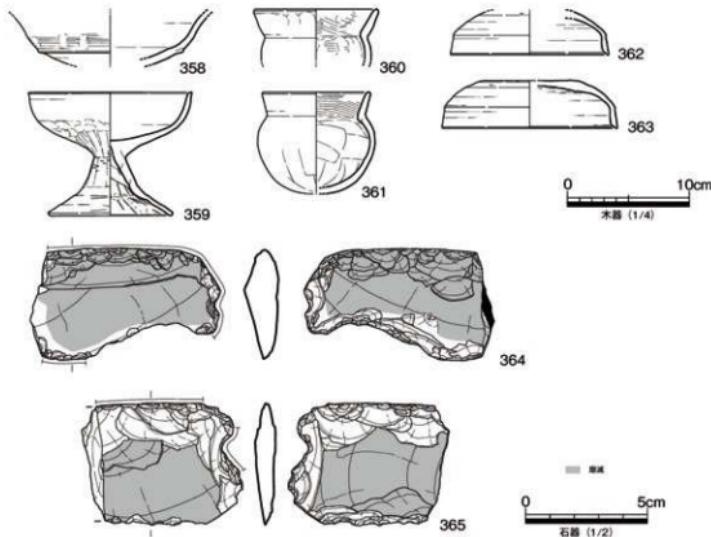
I a 区北部 SD04 上面で検出した小穴である。SD04 挖り下げ中に、遺物が出土したことにより遺構を確認した。柱穴は、長軸 0.52 m、短軸 0.48 m の平面隅丸方形状を呈し、残存深は 0.12 m で、断面形は箱形を呈する。埋土は単層で、底面からやや遊離して、図示した遺物が一括して出土した。建物遺構として組み合う柱穴が他に認められないことや、明確な柱痕が認められなかったことから、土坑の可能性も考えられる。

349 は須恵器杯身、**350** は同広口壺、**351** は同短頸壺である。時期的にはまとまっており、TK217 型式併行期の遺構と考えられる。

溝

SD04 (第 55・56 図)

I a 区中央部で検出した南北溝である。南北両端は調査区外へ延長する。南端部で SD07 と重複し、切り合い関係より SD07 より後出する。また、北半部で SD05 が東より合流する。検出面幅 3.4 ~ 4.5 m、残存深 0.33 ~ 0.52 m、断面形は概ね箱形を呈する。底面の標高は、北端部で 22.15 m を、南端部で 22.46 m をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していた可能性が考えられる。埋土は 8 層に細分され、



第56図 SD04出土遺物実測図

上下2層に大別する。上層（1～3層）は褐色系の細砂～シルトを中心とする堆積層で、溝機能停止後の自然堆積層と考えられる。下層（4～8層）は灰色系の砂～砂礫層で、溝機能時の水成堆積層である。

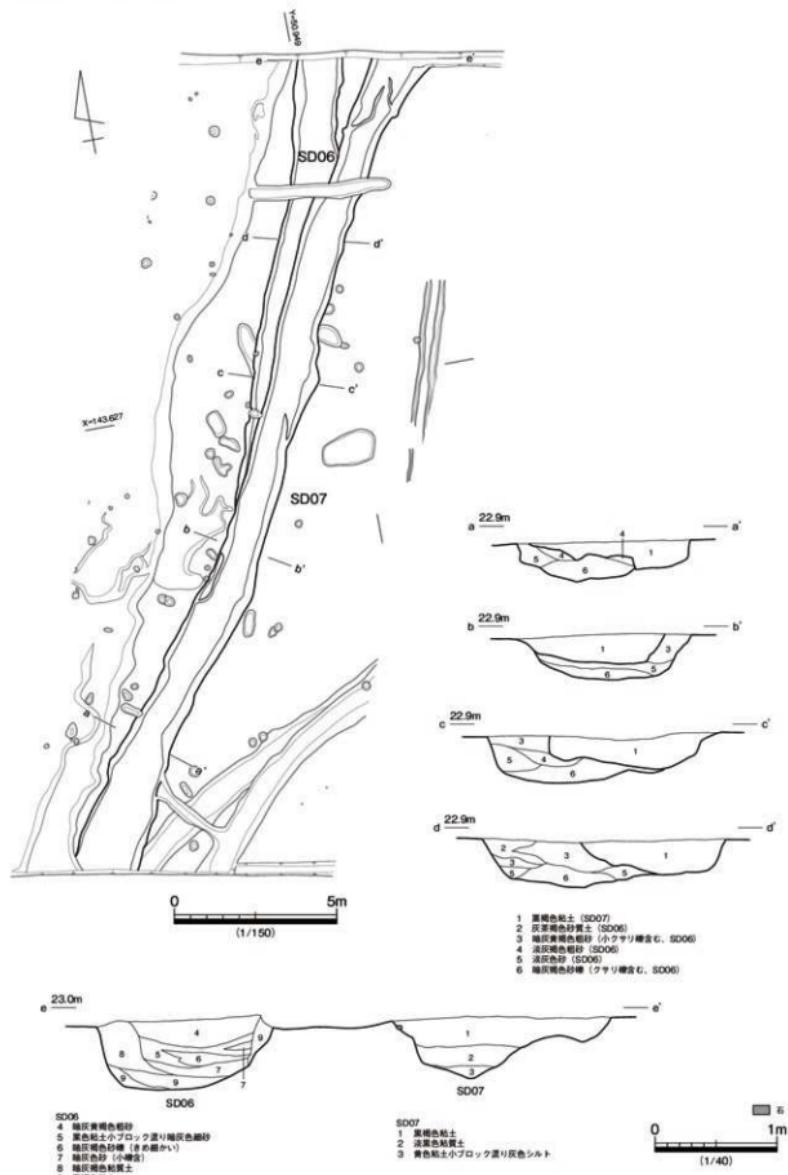
遺物は、弥生土器や土師器、須恵器等の破片がコンテナ6箱と多量に出土した。出土遺物の大半は弥生時代後期～終末期を中心とした土器片で、層位的に土師器や須恵器と区別することはできず、混入資料とみられる。図示した遺物は、すべて下層から出土した。357は、胎土中に角閃石粒を多量に含む甕で、口縁部内面にヨコナデによる凹線状の段を認める等、香東川下流域産弥生土器の特徴を備えるが、器形上はそれら土器から逸脱しており、おそらくは布留式初頭併行期に下る。混入資料であろう。353～356は、いずれも布留系の土師器甕、358・359は同高杯、360・361は同小型丸底土器である。362・363は須恵器杯蓋で、口縁端部内面に沈線状の段を認める。TK10～MT85型式併行期に位置付けられ、後述するSD07と大きな時期差が認められないことから、SD07埋没直後に本溝が開削されたと考えられる。また、上述したSP07開削期には、完全に埋没していたのであろう。

365は、サヌカイト製の打製石甕丁である。右図刃部付近を中心にやや強いマッテ痕を認める。364は、サヌカイト製の楔形石器だが、右側縁に浅いノッチがみられ、背部を中心に敲打により刃潰がみられることから、打製石甕丁を転用したものと考えられる。

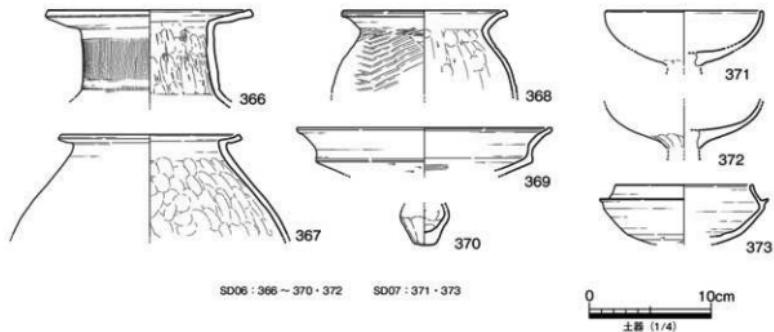
なお、本溝は、位置関係や規模、出土遺物の内容等より、本調査区の北約100mに位置する松林遺跡2次調査区SD17（高松市教育委員会2004a）と、一連の遺構である可能性が高い。

SD06（第57・58図）

I a区東半部で検出した南北溝である。SD05、SD07と重複し、切り合い関係よりそのいずれよりも



第57図 SD06・SD07平・断面図



第58図 SD06・SD07出土遺物実測図

先行する。検出面幅1.5m前後、残存深0.36~0.41m、断面形は概ね逆台形状を呈するとみられる。底面の標高は、北端部で22.31mを、南端部で22.46mをそれぞれ測り、高低差より北へ流下していた可能性が考えられる。埋土は3~4層に分層され、褐色系の砂質土~砂礫がレンズ状に堆積し、いずれも溝機能時の水成堆積層とみられる。

遺物は、弥生土器や土師器、須恵器等の破片がコンテナ1.5箱出土した。出土遺物の大半は弥生土器であるが、極少量だが出土した土師器高杯と器種不詳の須恵器小片から、当該時期の遺構の可能性を考える。弥生土器広口壺366、同壺367・368、同高杯369、同ミニチュア土器370があり、366・367・369は香東川下流域産である。いずれも弥生時代終末期に適り、混入資料であろう。372は、土師器高杯の杯部小片である。後述するSD07出土資料に近似し、両溝の位置関係から、本溝埋没直後にSD07が開削・改修されたと考える。

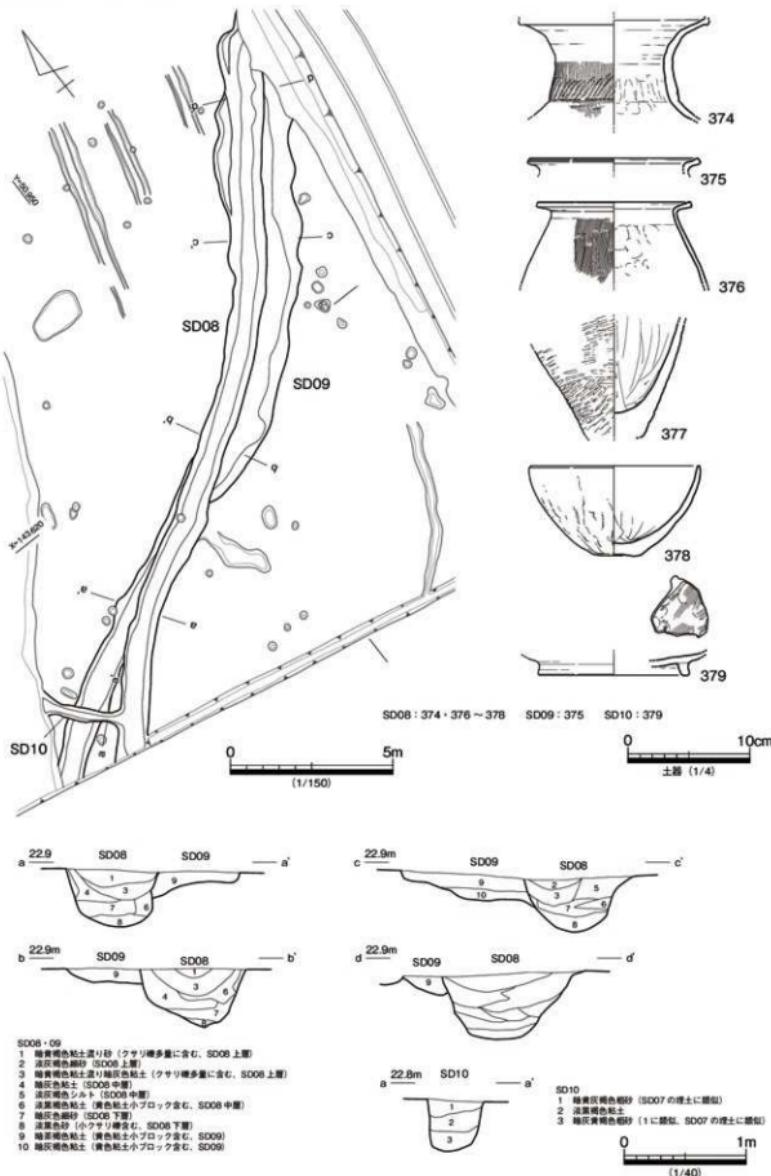
SD07（第57・58図）

I a区東半部で検出した南北溝である。南北両端は調査区外へ延長する。SD04、SD05、SD06と重複し、切り合い関係より前二者よりも先行し、後者よりも後出する。また南端部でSD10が東に派生してSD08と接続し、本溝とSD08が同時併存していたとみられる。溝は緩やかに蛇行し、流路方向は概ねN 31°Eに配される。検出面幅1.18~1.39m、残存深0.24~0.29m、断面形は概ね箱形ないし逆台形状を呈する。底面の標高は、北端部で22.42mを、南端部で22.43mをそれぞれ測り、概ね一定する。埋土は黒褐色粘土の単層であった。

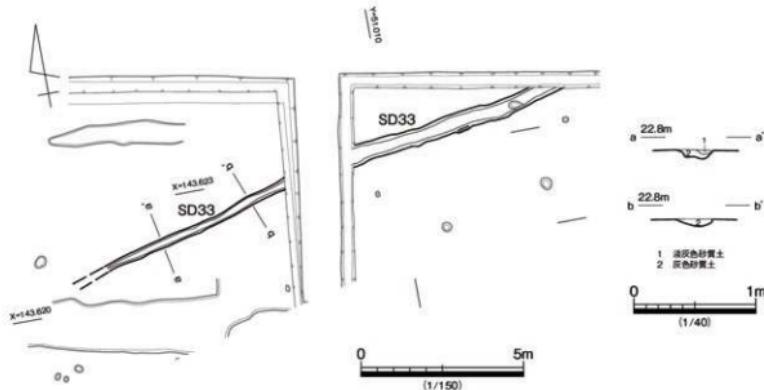
遺物は、弥生土器壺・甕、土師器高杯、須恵器杯身等の破片が、コンテナ1/2箱程度出土した。出土遺物の大半は弥生時代後期の資料が占める。371は土師器高杯の杯部小片である。373は須恵器杯身で、TK10~MT85型式併行期に位置付けられ、土師器高杯とともに、本溝の埋没時期を示す資料である。

SD08（第59図）

I a区東半部で検出した南北溝である。北端はSD18に切れられ、南端は調査区外へ延長する。またSD09と重複し、切り合い関係より後出する。溝は中央部で屈曲し、流路方向は概ねN 41.16°Eに配される。検出面幅0.76~0.88m、残存深0.46~0.48m、断面形は概ねU字状ないし逆台形状を呈する。



第 59 図 SD08～SD10 平・断面・出土遺物実測図



第60図 SD33平・断面図

底面の標高は、北端部で 22.21 m を、南端部で 22.35 m をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していた可能性が考えられる。埋土は 8 層に細分され、上～下の 3 層に大別する。上層（1～3 層）は、下位層を掘り込むように堆積した褐色系の砂ないし粘土層で、改修後の堆積層と考えられる。中層（4～6 層）はシルト～粘土層で、開削期の溝の機能停止後の自然堆積層とみられる。下層（7・8 層）は灰～黒色の砂層で、開削期の水成堆積層と考える。

遺物は、弥生土器壺・甕・高杯・鉢等の破片がコンテナ 1/3 箱程度出土した。遺物の層位別の取り上げはなされていない。出土遺物は弥生土器に限られ、概報（香川県教育委員会・御香川県埋蔵文化財調査センター 1998）でも弥生時代の遺構として報告されているが、既述したように SD10 を介して SD07 と同時併存の可能性が考えられることから、当該期の遺構として報告する。なお上述のように、改修の可能性が想定されるが、溝の規模から開削期を弥生時代に求める長期の改修の可能性は低いと考えられる。376 は香東川下流域産の弥生土器甕である。374 は同広口壺。頸基部外面にハケ状工具による斜線文を加える。弥生時代後期中葉に位置付けられる。377 はタタキ甕の底部片。底部外面は使用時の被熱により破裂・欠損する。378 は同鉢。体部の一部を欠損する以外は、ほぼ完形に復元される。

SD09（第 59 図）

I a 区東半部で検出した南北溝である。北端は SD18 に、南端は SD07 にそれぞれ切られ途切れる。また SD08、SD10 と重複し、そのいずれよりも先行する。検出面幅 1.0 m 前後、残存深 0.12 ～ 0.22 m、断面形状は概ね逆台形状を呈する。埋土は 1 ～ 2 層に分層され、褐色系粘土が堆積する。埋土中にはブロック土の混入が認められ、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

遺物は、弥生土器甕等の小片が 10 点程度出土した。出土遺物は弥生時代の資料に限られるが、流路方向や位置、規模等が SD08 と近似し、SD08 の前身溝である可能性が高いと判断し、当該時期の遺構として報告する。375 は香東川下流域産の弥生土器甕で、混入資料であろう。